別記様式第２号-1（第５条、第１０条、第１９条、第２４条関係）

学　位　論　文　の　要　旨

氏　　名	周倩
学位論文題目	村上春樹研究――語りの諸相と自他の表出――

本論文は、村上春樹が「デタッチメント」から「コミットメント」へと文学創作の態度を転換したとされる時期、一九九〇年代から二〇〇〇年代前半にかけて彼が発表した作品について、従来の「コミットメント」という枠組みでの読みから離れ、物語技法、特に表現法とそれによる他者表現の分析を通じて、村上文学の「コミットメント」の内実を検討し、この転換期における村上の文学的営為を再評価することを目的とするものである。

九〇年代以後、地下鉄サリン事件の被害者を取材対象とした『アンダーグラウンド』、オウム真理教の元信者を取材対象とした『約束された場所で』、及び地震をモチーフとする短編集『神の子どもたちはみんな踊る』という社会事件に関する一連の作品の発表と作家自身の「コミットメント」についての発言とが相俟って、この時期は、村上春樹が「デタッチメント」から「コミットメント」への大きな「転換」を迎えている時期とされている。そのためこの時期及びその以後に発表された作品は、これら社会事件と関連付け解釈されてきた。つまり、転換期に発表された作品に対する評価が高いとはいえない理由の一つとして、村上作品に対するアプローチが外的要素に基づくものに偏っている、ということが挙げられるのである。そのような状況下において、本論文は、作家の生い立ちや発言を検討するものにとどまっていた従来の村上論に対して、語られる内容から語りの形式そのものを問題にすることにしたい。

全体の構成は、以下の通りである。

序論では、まず村上文学の特徴及び村上作品における表現構造の特徴を整理する。次に、一九九〇年代から二〇〇〇年代の間に発表された作品についての研究現状を押さえる。

第一章は「「TV ピープル」論」である。「TV ピープル」は村上自ら何も書けない落ち込み状態からの「復帰」と呼ばれる重要な意味を持つ作品である。本

作は一人称表現と主観的な感覚表現の多用によって、さまざまな解釈を誘う特異な作品となっている。本章は、物語の表現構造及び他者という問題に着目し、一人称視点で他者を語ることのむずかしさを示唆する作品であることを論じる。

第二章は「「レキシントンの幽霊」論」である。村上春樹は一人称「僕」を一貫して使う作家であるとされる。「レキシントンの幽霊」も主に一人称「僕」により語られている作品である。本章は「レキシントン幽霊」のショート・バージョン（群像版）とロング・バージョン（単行本版）を比較しながら, 作品中に登場した一人称「僕」のあり方や人称機能の点から, 改稿の持つ意味を分析する。それを通して、「レキシントンの幽霊」はこれまでの村上作品に出てきた「僕」と異なる人称表現のあり方を示す作品であることを論じる。

第三章は「『スプートニクの恋人』論」である。『スプートニクの恋人』は一人称小説としての複雑さが現れている作品であるが、これについてはまだ十分には論じられていない。本章は、語り手の構造に焦点を当てて、この作品がすみれの物語でありながら、実は「傍観者」として設定された語り手「ぼく」の物語であることをあきらかにする。さらに、『スプートニクの恋人』は、語り手の位置変化を調節することを通して、自己言及的要素を内包する作品であるが、また、いかに自己言及をより客観的に実現できるかを探る作品でもあることを論じる。

第四章は「『アフターダーク』論」である。本章は、雰囲気の異なるマリとエリの姉妹物語がいかに紡ぎ出されているのかを、語り手のスタンスと語り方に注目しながら論じる。語り手は、物語の初めと終わりに「鳥瞰する」視点によって物語の枠を定め、出来事全体を語る自身を提示する。すなわち、物語の表現構造という側面からこの作品をとらえることによって、本作品は対照構造の鮮やかな、構成に工夫した小説としての姿が浮かび上がってくるのである。

第五章「「偶然の旅人」論」では人称と他者の問題を取り上げる。村上春樹は一人称表現の巧みさを特徴とする作家であるが、その手法は、他者をいかに描くかという問題の模索と深く関わっている。それは、「聞き書き」という手法の多用に表れている。それは、「聞き書き」という手法を導入することで、三人称化していく方向を見せながら、一人称表現の性格も内包されている「偶

然の旅人」には、一人称表現の可能性を十分に使いながら、語り手の位相の微調整を通して、他者をいかに構築していくかという作者の表現法における試みが見られる。

終章は上述の各章で考察してきた内容をまとめる。村上作品は「デタッチメントからコミットメント」という枠組みの中で扱われる傾向が顕著である。「デタッチメント」や「コミットメント」に過度なこだわりを持つことは、村上作品のごく一部だけを切り取ることになってしまう。本論は作品そのものの持つ物語構成のレベルで村上作品をとらえ、作品の表現構造と他者表現を手かがりとしてこの時期に発表された作品を分析することにより、村上春樹の「コミットメント」への転換と言われるものの内実をより客観的な文脈の中で炙り出し、一九九〇年代から二〇〇〇年代前半にかけて発表された作品を再評価しようとするものである。